

ご苦労さんと言えなかった。終戦後レイテで一年四か月捕虜生活をし、こき使われた。我が一二七防空隊（佐野隊）は、初空襲以来、撃墜総数一七九機と指揮小隊から聞いた。あとになったが二十年の三月二十一日の対空戦闘でB25一二機撃墜、南西方面司令官から電報による感状授与、さらに酒二升戴き各小隊で分けて呑んだ。

マニラ一番乗りの道は険しく

滋賀県 寺島 貞次

私は昭和十五年一月十日京都騎兵第二十連隊に現役兵として入隊したが、一年半で馬は返納し、我が部隊は捜索第十六連隊となり、機械化部隊軽装甲車および自動車部隊に変わりました。あのノモンハンにおいてソ連軍の戦車に蹂躪された悲惨な戦闘に対処するため、毎日昼夜訓練が繰り返されました。

昭和十六年十一月に入って、これから寒くなるのに新品の夏服が配布されました。これはきつと南方へ行くの

だなあと思ひ、小隊長や中隊長に聞いてみたが、どこか分からんとのことでした。そのうち「今度は生きて帰ると思うな、一泊の外出を許すから皆髪を剃って遺髪として家に置いてこい」との命令がでたのです。

十一月二十二日夜秘かに屯営を出発しました。大阪の港から七〇〇屯の東福丸に乗船しました。蚕の棚と同じような貨物船で畳一枚に四人が入り、梯子を登って膝で歩かねばなりませんでした。九州を出て奄美大島で約一週間上陸演習が繰り返された。

十二月八日、ハワイの奇襲攻撃が敢行され太平洋戦争に突入した。堂々の輸送船団が護衛艦に守られて比島へ向かった。敵の飛行機および潜水艦に対空対潜監視衛兵、不寝番、また食事当番と中々忙しいが皆船に酔って働けない。幸い自分は船には強かったので皆やってのけた。

二十二日未明、敵前上陸の命令が出た。空からは敵機の爆撃が続く中を、完全武装に身を固めて銃を手に暗闇の中、甲板より繩梯子を降り上陸用舟艇に飛び降りた。超スピードで敵前へ向かって突進した。とてもやないが近くまで行けない、背も届かぬ海岸で飛び降りた。待ち

構えた敵の銃火をくぐり、死にもの狂いで突進した。あたりが明るくなると先に上陸した戦友の死体と椰子の実で踏み場もない。上陸で相当の戦死者が出たのである。

比島は山が深くて川も深く、大きな橋が山の谷にかかっている。第一線の先頭で進む我が捜索隊は自動車も装甲車も動かない。しかも橋は皆敵が落としているのである。川の向こうに敵が待ち受けている中を、敵前渡河した。敵の掃射は激しく、我が小隊長は数弾を受けて壮烈な戦死をされた。後で見たが、この戦闘の状況が新聞に「蜂の巣の軍服」と載っていた。また峠へ進んだ時には高い処から物凄い銃弾を浴びた。とても進めない。水牛が入っている泥沼に一昼夜漬かっていた。夜になると曳光弾が火の雨を降らせた。

夜が明けると泥の前にあった椰子の木が倒れるくらいに穴があいていた。銃は泥がつかまって撃つことができない。その時自分は左耳下をやられて軍服も血が流れてまっ赤であるが、死にもの狂いだったので気が付かなかった。首の所を敵弾がかすめたらしい。もう少し右の方であったら命をとられていたのだ。ここでまた命拾い

をしたのであるが後で首が回らんほど痛みが出た。

戦い止んで後方の野戦病院へ二日間後退した。敵も味方もなく敵兵が二人足をやられていた。また頭をやられた戦友二十数人が手当てを受けていたが、気違い（気狂い）のようになって皆死んで行った。自分の傷くらい何でもないように思えて負傷者の世話をしあげたが、「こんな所にいられない、早く第一線へ行かねば・・・」戦友が待っている。早く隊へ送ってくれ」と頼んで、戦友を自動車に三人乗せて第一線に追いついたが、負傷している三人は途中で息絶えてしまった。まだ首は痛んで仕方がないが戦死した戦友のことを思えば、何養「仇を撃ってやるぞ」と勇気を出して次の戦闘に向かった。そのうちに落された橋も工兵の奮闘で仮橋が架けられ自動車、装甲車も追いついてきた。

次の戦闘で敵の捕虜を一人捕らえた。彼は曹長である。通訳の話では、「日本兵が今比島を占領してもきつと、マッカーサーは比島を取り返しに来る。私は祖国のために死んでいく。早く殺してくれ」と、日本人と同じことをいっているという。あの一言は今でも忘れられない。

よい度胸の持ち主であった。色々と敵の情報を聞いて後方の本部へ報告した。

幾日も食はず服はボロボロ、足はフラフラ、今にも倒れそうになり歩けない。人のいない民家で腹ごしらえをし、そこにあった着物に着替えてフィリピン人に変装した。一日も早くマニラに入城するため近道のジャングルへ入った。

ジャングルでは工兵隊の火焰放射機の応援で敵を焼き撃ちして貰った。道路に出てトラックに乗ったが、高所から敵の一斉射撃を受け、飛び降りるまでに周囲の戦友は皆倒れた。後から来た味方に助けられ戦死者をトラックに乗せ替えて進み、夜になって戦死した約四十人の戦友を火葬に付した。遺骨は一人一人丁寧に缶詰の空き缶へ納め、名前を書いて各人に分けた。自分も五人の遺骨を首に掛けて進んだ。

その夜、マニラの玄関である「パサイ橋梁を占領して死守せよ」との命令が出た。我が分隊は殆ど戦死し、二個分隊が合併してもわずか六人しか残っていなかったが、連射砲の応援を得てパサイ橋を占領した。この橋は河が

深く、距離も長く、敵に陥されたら我が軍のマニラ入城は大変遅くなる所だった。マニラの市街地では何処からともなく敵の掃射を浴びたが、連射砲の応援得てを十七年一月一日未明、マニラ一番乗り成功した。

在留邦人は全員日本人倶楽部に軟禁されていた。我々の顔を見て涙を流して迎えたくれた。自分も日本に帰ったような気がした。まだまだ市街戦が続くので取り敢えず戦友の遺骨を、祭壇を作って祭り冥福をお祈りした。

その後、マニラ入口の検問、あの名高いモンテンルパの刑務所などの警備についた。また続いてバターン半島の死の行軍戦やコレヒドール島の戦いにも参加し、ついでミンドロ島の守備についた。

ミンドロ島は敵の残りが多く、アジトを作って食糧や兵器も多く、これらの情報を得るのに相当苦労した。このため住民の宣撫をやりながらタカログ語を勉強し、フィリピン人にも友人を作り、それを利用して情報を得て、山奥へ討伐に行った。しかしジャングルは道がなく雨季になると谷が相当な河になり、人跡未踏の山もある。我々と反対の方から行った小隊は雨のため食糧も尽き、

筏を組んで河を下ったが、増水で流され全員戦死した。

フィリピン人の案内でジャングルを行くのであるが、待ち伏せしている敵に皆やられ、戦死した戦友を背負って引き返してことが何回もある。またこの島は原始林が多く、大木は四層くらい上から根が広がっており、その下で皆が寝たこともある。また自分の腕よりも太い籐の蔓を番刀で切って、汁を飲んだこともある。また二層以上もある大蛇もトカゲも何回見たことか。

このような情けない生き地獄の山中で、通信隊の交信によって、四年兵に満期命令が出たことを知った。本当に夢のようである。中隊長は泣きながら言った。「この困っている最中に君たちが帰ったらどうするのか。一番頼りにしているのに俺の手足をとられたのと同じだ。帰っても直ぐまた来てくれ」

その後、戦況は逆転していき、あのレイテ島も玉砕し、また比島全域も敵に奪還されたのである。

最後に何時までも忘れられないのは、殺さねば殺されるのが戦争であるということである。また何人かの最後の水も与えたが息の絶える時、本当の最後は「お母さん」

と行って皆死んでいったことである。

私の弟はあのレイテ島のオルモックにて玉砕した。また末の弟は神戸の須磨区の三菱造船所でB 29の爆撃で爆死したのである。おそらく最後は「お母さん」と叫んで死んでいったことと信じます。何時までも戦争のない、平和な世界が続きますようお祈りいたします。

南方戦線

福島県 上神谷 林 太

チモール島ラウテン港の戦闘

昭和十八年十二月七日、スンバ島に向かうため乗船、ラウテン港沖に停泊中敵機二機来襲、銃撃を受け爆弾が中ほどと船尾に二発命中、船火事となり海に飛び込んだが工兵隊と思われる舟艇に助けられて上陸することが出来た。第二中隊伊藤三男軍曹の引率の下に、連隊本部ジャワ島スラバヤに進出したのは、十九年一月十七日ごろで第二中隊瀧口班に配属となる。その後七月二十八日ゴク